

高次脳機能障害集団プログラム効果について

○渡辺幸子¹⁾、佐敷俊成¹⁾、武田慶子¹⁾、竹前恵美¹⁾、田村恵子¹⁾、日浅茉依¹⁾、川上寿一¹⁾
中井秀昭²⁾

1) 滋賀県立成人病センター リハビリテーション科

2) 滋賀県立リハビリテーションセンター

主旨：

滋賀県立リハビリテーションセンターと滋賀県立成人病センターの共同事業である高次脳機能障害者の集団プログラムは平成 20 年から継続的に実施している。既に 10 回目を迎えたが、プログラムの効果をどのように抽出するかについては毎年課題として挙げていた。そこで、今回は効果検証の 1 つとして、プログラム参加者の中でその後就労を経験した者とその家族に対しアンケート調査を行い、参加者やその家族の回想から主観的な効果とプログラムとの関連の抽出を試みた。アンケートの内容は、プログラムに関する記憶、覚知、習得、不全、不足、対人関係の 6 軸からの質問に有無を答えた後、自由記載欄を設けた。

復職もしくは新規就労を経験した参加者 19 名とその家族に協力をもとめたところ、参加者からは 16 名 (84.2%)、家族は 11 名 (57.8%) から回答を得ることができた。

集計結果からは、プログラムの中で得たことや活用していることがあると答えた参加者や家族は多く、量的分析からはその内容にコミュニケーション技術に関連する項目が多く含まれていることがわかった。その他にも、メモとりなどの代償行動についても具体的に獲得したスキルとして挙げられていた。一方でスキルの活用不全や実社会とのギャップ、周囲の理解不振なども課題として挙げられた。これについては、スキルの個別性と汎化をどのようにして個別訓練と集団プログラムで解決していくのかという治療戦略の課題として、そして、プログラム参加後の支援展開の課題として今後検討していく必要があると思われる。

今回のアンケート調査では、具体的なプログラムとその効果について詳細な関連性をみることはできなかった。これは高次脳機能障害者の記憶障害を始めとした認知障害による影響も大きい。今後はプログラムで習得したことについて実際の活用状況を確認するなど、行動上の評価も効果検証の方法として検討していく必要がある。

【はじめに】

高次脳機能障害支援モデル事業では、拠点病院や拠点機関による集団アプローチが報告されており 1)、それ以降も、認知機能障害や社会的行動障害に対してや、職業訓練の一環として、また、心理的問題をテーマとして扱ったものなど、様々な領域で多種多様なアプローチが報告されてきた 2)~10)。平成 20 年に出された「高次脳機能障害の支援の手引き」にも社会生活技能の向上や障害の自己認識・現実検討を行う為の手段として、グループプログラムが紹介されている 11)。

当センターで行っている高次脳機能障害集団プログラムは、滋賀県立リハビリテーションセンターと滋賀県立成人病センターの共同事業として、平成 20 年度から平成 26 年度までの間に計 10 回開催している。この事業は「当事者の疾病や障害としての面と社会における面の双方に対して医療的なりハビリテーションとして関与する」と位置づけし、本県で就労に向けて有効で系統的な集団プログラムを検討、実施し、運用することを目的としていた 12)。

プログラムの内容は毎年見直しを図り、開催当初よりもより系統的で体系的な内容に展開してきており、その有益性を発表する機会もいくつか得ることができた。平成 26 年度の段階で実際に集団プログラムを受講して復職、もしくは新規就労にたどり着いた者は、これまでの参加者 31 名に対して 19 名（全体の 61.2%）におよんでいる。医療機関を対象に行った全国実態調査では、認知障害別にしても就労率が 0%~8%とあり 13)、この結果と比べても多いと思われる。

しかしながら、集団プログラムの性質上多様な要素が絡んでいるため、未だプログラムの内容と参加者の就労復帰などの社会参加についての関係については解明できていない。

そこで、成果抽出の一つの方法として、これまでに集団プログラムを受け、復職もしくは新規就労を果たした参加者とその家族に対して追跡調査を行い、取り組みの効果について検討することにした。

【対象者】

高次脳機能障害集団プログラムに参加した対象者のうち、就労を経験した者 19 名。

上記の家族 19 名。

【方法】

これまでの参加者計 31 名中 19 名の就労経験者に対してアンケートとテーマ作文の記入を依頼する。また、家族に対してアンケート記入を郵送にて依頼する。アンケートに関しては（記憶）（覚知）（習得）（不全）（不足）（対人関係）（感想）の 6 軸で設問を作成し、有無（あった・あったが思い出せない・なかった）を回答した後で自由記述を依頼した。最後に（感想）という形で自由記載欄を設けた。

1) 集団参加者向けアンケート内容

設問 1（記憶）「集団プログラムに参加して、あなた自身はどのような経験をしましたか？」

（印象に残ったプログラム内容、印象に残った出来事、印象に残った人など）

設問 2（覚知）「集団プログラムに参加をして得られたことはありましたか？」

設問 3（習得）「集団プログラムで得たことを、日常生活や仕事先、そのほか他の社会参加場所で活用されましたか？また、そこから今でも自分なりに工夫して続けていることはありますか？」

設問 4（不全）「集団プログラムで得たことで、やってみただけどうまういかなかったと感じたことや、役に立たなかったことはありましたか？」

設問 5（不足）「集団プログラムに参加されて、こんなことをもって欲しかったと思うことはありますか？」

設問 6（対人関係）「集団プログラムを経験して、人との関係の取り方が変わったところはありませんか？」

（どのようなところが変わりましたか？仕事上で人と関わる上で意識していることはどのようなことですか？）

設問 7（自由記載）「集団プログラムについて自由な感想を書いてください。」

2) 家族向けアンケート内容

設問 1（記憶）「集団プログラムについて、ご本人が語られていたことはありましたか？」

設問 2（覚知）「集団プログラムに参加されたことで、ご家族様からみてご本人が得られたことはありますか？」

設問 3（習得）「集団プログラムに参加したことで、ご家族様から見て変化を感じた点がありますか？」

設問 4（不全）「集団プログラムに参加して得られたことはあったが、実際の社会参加（仕事も含む）ではうまくいかなかったことや、また活かされなかったことはありますか？」

設問 5（不足）「集団プログラムについて、こういうことをして欲しかったということはありませんか？」

設問 6（対人関係）「集団プログラムに参加して、ご家族関係に影響や変化はありましたか？」

設問 7（自由記載）「その他、他にご家族からみて、変化を感じた点があればご記入ください。」

上記のアンケート結果集計より、本人が集団プログラムによって体験した事柄を回想し、抽出する。その中で、本人が獲得した社会的行動能力等を抽出し整理する。その内容とプログラムの内容・目的性を検討する。

3) テーマ作文

「集団プログラムに参加してよかったこと、役に立ったこと」という内容で作文を書いてもらい、作文内容からアンケートと同様に社会的行動等を抽出、整理し、プログラムとの関係を分析する。

【対象者への配慮】

対象者の中には、重度の記憶障害や軽度の言語障害が残存する者がいた。また、「想起して考えて文章にする」という情報処理に非常に時間がかかる者もいた。そのため、当時のことを想起しやすくする材料として本人が取り組んだ当時のプログラム資料の複写を資料として提供した。また、文章が書きづらい対象者のために、インタビューにて回答しやすいようにした。アンケート記入が可能な対象者でも、内容の理解や情報処理に問題が生じる場合があるため可能な限りインタビューを実施し、どの対象者についても一定の情報量が得られるように配慮と工夫をした。

【調査の妥当性における配慮】

患者-治療者関係から面接による誘導を防ぐために、インタビュアーは集団プログラム実施者や担当セラピストなど対象者を知る者を除き、対象者と面識のないセラピストがインタビューを担当した。また、質問についても「このことについてもう少し詳しく聞かせてください」「〇〇とはどうのことですか？」という詳細を聞く質問に控え、対象者の自発的な回答を得るようにした。

【倫理上の配慮】

本研究は滋賀県立リハビリテーションセンター及び、滋賀県立成人病センターの倫理委員会の承認を受けており、対象者には研究目的と内容を説明した上で調査結果の公開許可を得ている。また、調査結果からは回答者が特定できないように配慮している。

【結果】

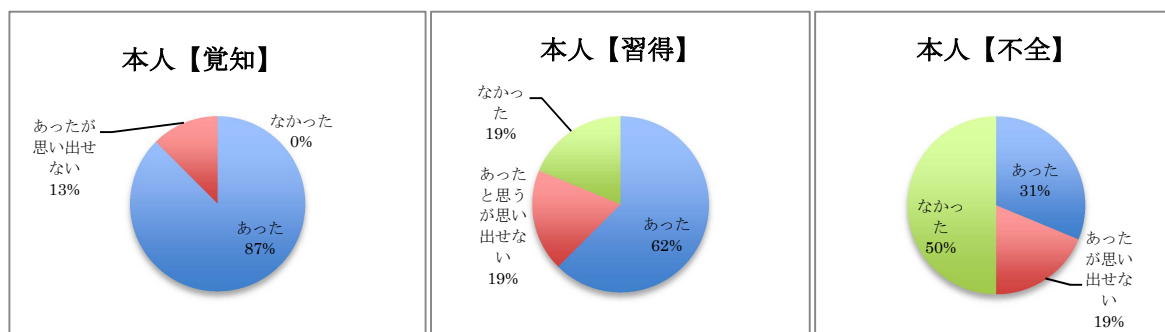
1. 回答について

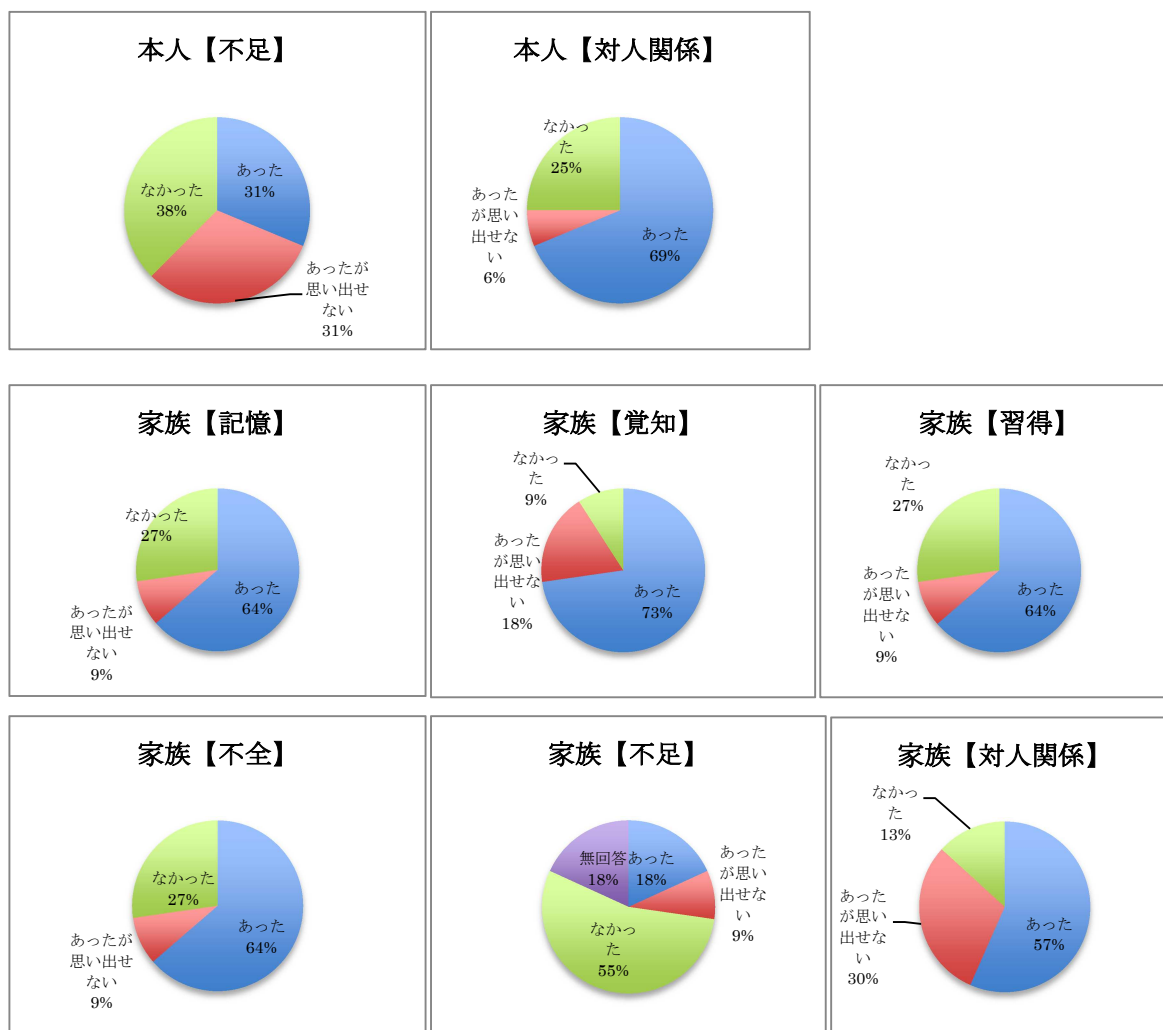
就労を経験した対象者 19 名中 15 名からアンケートとインタビューによる回答が得られ、1 名からはアンケートのみの回答を得た。後日提出の作文については、7 名からの回答を得た。家族からは 19 名中 11 名からアンケートによる回答を得た。回答を得られた参加者の詳細は以下の通りである。

年齢	性別	疾患	職業	年齢	性別	疾患	職業
58 歳	男性	交通事故	新規(アルバイト)	51 歳	男性	低酸素脳症	復職(正規雇用)
57 歳	男性	交通事故	復職(正規雇用)	56 歳	男性	脳出血	新規(正規雇用)
22 歳	男性	脳腫瘍	新規(アルバイト)	38 歳	女性	脳出血	新規(アルバイト)
49 歳	男性	くも膜下出血	復職(非常勤)	31 歳	女性	脳炎	復職(自営手伝い)
54 歳	男性	交通事故	復職(自営)	58 歳	男性	くも膜下出血	新規(福祉就労)
26 歳	男性	脳梗塞	新規(正規雇用)	37 歳	男性	交通事故	新規(正規雇用)
44 歳	男性	交通事故	復職(正規雇用)	36 歳	男性	多発性硬化症	新規(非常勤)
34 歳	男性	交通事故	復職(正規雇用)	26 歳	男性	交通事故	新規(アルバイト)

2. 集計結果について

参加者では、「覚知」16/16 名 (100%)、「習得」13/16 名 (81%)、「対人関係」12/16 名 (75%) の割合で「あった」もしくは、「あったと思うが思い出せない」と回答をしていた。「不全」は 8/16 名 (50%) であった。家族については「覚知」は 10/11 名 (91%)、「記憶」「習得」「不全」はそれぞれ 8/11 名 (73%)、対人関係は 6/11 名 (55%) であった。「不足」については、参加者は 10/16 名 (62%) に対し、家族は 3/11 名 (27%) であった。





3. 本人のアンケート結果について

以下、アンケートの記述内容の結果について質問項目ごとに記載する。

①記憶「集団プログラムに参加して、あなた自身はどのような経験をしましたか？」

(印象に残ったプログラム内容、印象に残った出来事、印象に残った人など)

上記の質問に対して、具体的に想起できた者もいれば、ファイルをみながら思い出す者もいた。ファイルをみても想起できない者もいた。具体的な回答は表1のとおりである。

ア) 印象に残ったプログラム

PT「体を動かす」「ストレッチ」「バランス運動」「縄跳び」など、STは「LaQ」「4コマ漫画の伝達」など、OTは「グループで料理したこと」「面識のない人の中で発表」CP「伝言ゲーム」「話を聞くとときに相づちをうちながら聴くことや相手の目を見ながら話すこと」「自分カードの記入」などが挙げられた。具体的なプログラムは挙げられなくても、「ゲームをしたり、話し合いをした」「一つのテーマ、問題について皆の意見が聞けた」など状況の一部について述べた者もいた。

イ) 印象に残った出来事

「風船バレー」「体を使う体操」「物体をみて、形、色を言葉で教える」など具体的なプログラムを述べる者もいれば、「一緒の問題を話し合う」といったコミュニケーションに

ついて述べたり「タイムキーパーの役割をしていたが、指定の時間が来たときに知らせるという指示を忘れていた」と役割不全が印象に残った者もいた。

ウ) 印象に残った人

メンバーやスタッフの名前が回答されることは少なく、「よく覚えていない」と率直に記憶がないことを回答したり、「友人と外食し外出したことを述べた人」「同世代の人がいた」と特徴の一部について想起した者もいた。

表 1(記憶)

プログラム:人と接すること。ゲームをしたり話し合いをしていた。 出来事:いろいろな内容により話し合う。家族との日常会話とは違って、初対面の方と話す機会を得られた。 仕事に行くことは、(話す相手は)家族だけではないので。 人:いろんな人がいたが今は良く覚えていない。「農業」のことや、「以前の仕事」について話していた。以前に〇〇(具体的な仕事名)をやっておられた方がいた。
プログラム:聞き取りシート 出来事:自分と同じ活動をしている人(仲間)の紹介をまとめる作業。「友人(との交流)」についてのインパクトが大きかった。自分の境遇に当てはめると、自分は仕事が主になっているので個人の余暇活動への余裕がなかったし、そのような外出機会も少なかったからすごいなと思った。人:友人と外食をし、外出することを述べた人。自分よりも若い人が多かった。
プログラム:PT ストレッチ、バランス運動、スポーツ。体を動かすのは楽しかった。基本的に中学校とかの体育の授業以外でみんなで運動することはないので楽しかった。ブロック作り。見本があって、3人グループで一緒に見本と同じ物を作る。何分間かみて記憶して作る。うまくできなかった、難しかった。4コマ漫画の伝達:見たのを相手に伝える。全体的に新鮮でした。コミュニケーションをとる方ではないので。 出来事:風船バレー 人:いなかった
皆各グループで何かブロックを作った。伝言ゲーム。協力し合いながら、いろんなやりとりしながら見よう見まねで。会話することが大事。話し上手になること、言葉のやりとり、人の話をよく聞くこと、ききもらさないことが大事。
出来事:みなさんといっしょの問題はいっしょに話した。一つのテーマ、問題について皆の意見が聞けたのがよかった、一人の考え方がなくて。仕事上でも自分の思いがこうであっても他の人はそうでないこともある、そこに合うのが難しい。でもそこを考えていかなあかんと思う。人それぞれ、商売するうえで把握しておかないといけない、いろんな人の話をきいて大きくなっていくと思うので。
具体的なこと(プログラムの内容や出来事)は思い出せない。だが、他の人たちが頑張っているのを見て自分も頑張らないといけないという気持ちになったことは覚えている。 人:名前は覚えてませんね・・・顔ならわかるんですけど。(ファイルをみて)ああ、Aさんは一番印象に残ってますね。Bさん思い出せます。Cさん、今思い出した。
プログラム:ラQの組み立てた物を他人に伝える。自分がLAQのブロックの形状を見て、それを他の4人に伝える役割だったが、一人だけ自分の説明では理解出来ない人がいて、その人が理解しやすいようなものが何かを考えながら、色々な例えを出して説明した。結果、全てのメンバーに自分が説明したいことを伝えることが出来た。その人にとってわかりやすい表現で伝えることの難しさ、他人にわかりやすい表現で伝えることの難しさをこの作業を通して非常に感じた。 出来事:物体を見て、形、色を言葉で教える 人:一人は見て伝え、4人は物体を答える
プログラム:グループで相談する。 出来事:タイムキーパーが話していると忘れていた。タイムキーパーの役割をしていたが、指定の時間が来たときに知らせるという指示を忘れていた。 人:印象に残った人はDさん、バイク好きで覚えていた。
プログラム:グループで料理をしたこと。作るメニューを計画して家族も一緒に食べたこと。 出来事:自分は少し苦手だったが、グループ討論がプログラムの中でいくつかあり、話を聞くとときに相づちをうちながら聴くことや、相手の目をみながら話すことを意識した。 人:メンバーで仲良く話せる人もいれば、先生に対して怒っている人もいた。何故この人が病気のなか?と思いつつも、人それぞれ色々な障害を抱えていることがわかった。
プログラム:もけいを見て実際に作る。内容は模型を順番に見に行きながら覚えておくこと。見落としがあった。メンバーの中に女性がいて、うまく伝えていた。自分とは見方が違うと思った。 出来事:よく見たつもりでも見落としがあった。 人:同じ参加者。
プログラム:CPの自分カード。「自分カード」の記入が印象に残った。→転職活動に役立つ、自分で気づけなかったところの気づきなど、今後の生活に利用することができた 人:Eさん(CP) Fさん、Gさん
プログラム:外でやった運動作業。外に出て体を動かして色々やる、スポーツ、PT。普段体を動かす機会が少ないのでやりがいがあった。STでやったブロック、サンプル、結構難しかったけど、そこそ自分ではできた。 出来事:体を使ういろいろな体験。
退院後の5年前に受けたと思う。プログラムはイヤイヤ参加してた。勧められたかどうかはわからない。 プログラム:縄跳び。そんなん出来るに決まってるのに、何でやらなあかんねん!って思った。 出来事:となりの部屋にパズル(わからん)があって、一人ずつ見に行き行って作る。よくわからない。どっちも使った気もするし・・・、よく覚えてない。一人ずつ隣の部屋においてあるものを見に行き行って、どんなものだったかを他の人に伝えるんだけど、上手く伝わらずにイライラした。あと、作る側の人も作業の仕方がバラバラで全然まとまらなかった。結局完成できなかった。現実場面では同じようなことがあっても、「ささいなこと」と捉えているために良く覚えてない。

人: 全員。自分よりひどい人がいることを初めて知った。車の運転が出来ない人、人の名前や顔を覚えられない人。

病前に出来ていたことが出来なくなり、それが他者から指摘されることが多かったこともあって引きこもってしまうことがあった。そんな中で集団プログラムに誘って戴き、参加してみた。参加すると、自分のまわりにはいない(日常的になかなか会うことが出来ないような)仲間がいて、「自分だけじゃない」と思うことが出来た。またプログラムの内容自体が出来た・出来ないではなく、自分と同じように頑張っている人がいることがわかって、次のステップ(就業)に進んでみようと思うきっかけになった。

出来事: 最後の発表。面識の無い人達の前で発表することになったが、極度の緊張のあまり発表後体調を崩したから。頭が真っ白になって…。何を発表したかは覚えてません。

人: 同世代の男の人がいました。その時はプログラム中に話すことはあったと思いますが、それ以上親しく話をすることは無かったと思います。プログラム以来、会ってもいませんし。

②覚知「集団プログラムに参加をして得られたことはありましたか？」

上記の質問について「あった」と答えたのは14名、「あったと思うが思い出せない」と答えたのが2名であり、「なかった」と答えた対象者はいなかった。具体的には表2に示す通りである。内容については「自分は覚えられないという障害があるけど、他の人たちにもこんな障害があるのだと思った」「自分と同じような障害を持つ人とのふれあいから自分自身を見つめ直すことができた」など自分以外の他者を通じた自己の対象化について述べた回答が得られた。また、「人の意見を聞いたり話したりすること」「一人一人の考え方が違うので勉強になった」「他の人とのコミュニケーション」などコミュニケーション面について挙げた者もいた。また、「メモを取ることの必要性やメモの活用の仕方を学んだ」「メモを取ること」「今までの取り方と違うメモだったけど、現在の自分にあったメモの取り方を学んだ」など記録に関する回答が得られた。その他、「自分が思っていることが上手く言えない。言葉が出にくいことに気づいた」「みんなで協力して1つのことに対して仕上げたこと」相互作用による自己の発見や共同作業について述べる者もいた。

表2(覚知)

いろんな人と話し、ある程度他の人を理解し、接する。自分は覚えていられないという障害があるけど、他の人たちにもこんな障害があるのだと思った。話しやすさは特に変わらない。
自分と同じような障害を持つ人とのふれあいから自分自身を見つめなおすことができた。受け取り方が細かい人、ていねいに対応する人などグループの人の特色を観察し、自分の姿にてらしあわせた。
メモをとること。仕事で言われたことをメモしている話があがってしまう。前は(話)できてたけど今はそうでもない。 今続けているのはメモをとること
言葉のやりとり 会話。休職中やったらから人と話す機会を持つこと、話をする場所があるのは大事やった。会話が成立するようになった。
1人1人の考え方が違うので聞いて勉強になりました。いろんな人としゃべることによって、いろんな人の意見を聞くことは大事。商売していく上で、いい勉強になった。自分の仕事はサラリーマンや流れ作業じゃないから、正論が通じないこともあるので、向こうの意見も聞いてまんべんなくまわすのが大事、こういう考え方があるんやなあ。
自分の同じような悩みを持った方や、色々な人がいて、皆さんがそれぞれがんばっておられるのを実感でき、自分のやる気がしゅうろうに対する意よくにつながった。退院してから患者さんに会うことがなかった。この機会(集団プログラム)でリハビリを頑張っていく他の人たちを見て自分も頑張らないうちと思った。
自分一人が見た物を他人に正しく伝える。人それぞれに守備範囲(見ている物、感じていること)が違う。その人の見方に寄り添って物事を伝えることの大切さを感じた。
人の意見を聞いたり、話したり出来た事。年上の人の考え方が勉強できたと思った。自身で話したことは覚えていない。
メモをとることの必要性やそのメモの活用の仕方を学んだ。 今もポケットサイズの手帳を胸ポケットの中に入れており、常にその日にやることややったことを確認している。手帳の中身は1日1ページくらいのペースで、「やることリスト」で活用している。
他の人とのコミュニケーション。世間話を主にした。その内容はあんまり覚えていない。自分の現状とこの病気になってどのような症状があった。相手の話で印象に残ったことはない。
自分自身を理解できた。自分が思っていることがうまく言えない、言葉が出にくいことが気づけた。周りの人が何を言っているのか分からなくて、その場では理解できなかったが、後で振り返って分かったこともある。自分の発言も後で振り返ってみると、もっとこう言った方が良かったのかなと思った。振り返る機会が多くなった。
色々な人の考えを聞くことで、自分の中でも、色々考えられるようになった。
みんなで協力して一つのことにに対して仕上げた事。仕事がトップにいたので、ひとりですることばかりでトップダウンで、協力することがなかった。新しく今までやったことがない作業だったので(みんなで協力してする)楽しんでできた。楽しかった。
何がプラスになったかは覚えていない。自分が覚えていないことについては、いいことでもあり、悪いことでもあると考えている
記憶に自信がないことが再確認できて、そのことに対する対処法を学べた。メモの取り方。メモをとった時間や状況など、今までの取り方とは違うメモだったけど、現在の自分にあったメモの取り方を学びました。
よくわかりません。あったかもしれないけど覚えてません。

③習得「集団プログラムで得たことを、日常生活や仕事先、そのほか他の社会参加場所で活用されましたか？また、そこから今でも自分なりに工夫して続けていることはありますか？」

上記の質問について、「あった」と答えたのは10名、「あったと思うが思い出せない」と答えたのが3名であり、「なかった」と答えたのが3名であった。具体的には表3に示す通りである。回答については、「あった」及び「あったと思うが思い出せない」と答えた中では、「仕事場の人の話を聞き、必要な時は確認する」「迅速に正確に物事を次の部署に伝えに行かなくていけない」

「人の意見を聞く」「ほう・れん・そう（報告・連絡・相談）」等の理解・確認と伝達・報告に関しての回答や「メモをとること」「人の話を聞く時はメモをとる」「手帳を必ず持つて」「予定表を作る」「ポケットサイズの手帳を胸ポケットの中に入れて」「スケジュール管理」など記録と管理についての回答が得られた。

「なかった」とした回答の中には「プログラムとして行ったことではない」「あんまりない」という回答もみられた。

表 3(習得)

仕事場の人の話を聞き必要ときは確認する。「はい、わかりました」だけでは本当に大丈夫かと思うので、具体的な事を聞く。人の話を聞くときはメモをとる。手帳を必ずもって、仕事先から連絡が来たときにすぐメモできるようにしている。
自分の思いをすべて出すのではなく、まずまわりの状況をはあくしてから自分の思いを言うようになった。自分が相手にどういう受け取り方をされているかを考えるようになった。以前は自分の考えを前面に出すことは特に気にすることはなかったが、言動には用心深くなった。自分が言ったことで、波紋が広がるのがかなわんから口数も少なくなった。自分に自信がないものもあるし。
メモをとること。メモをとることで忘れにくい。予定表をつくる。他の先生に言われたので手帳、日記みたいなもの。聞くより書く方が覚ええられる。書いた方が頭に入る。できるだけ書くようにしてます。
仕事で何気なく自然に、日常会話ができるようになった。気を使わずに普通にとけこんで話をしている。人の話をよく聞くようになった。一方通行ではなく、きかんじゅうのようでなく話をする。
いろんな意見や考え方があるのは当たり前なので。今のところ紹介や応援の仕事が多いので、いちげんさん、全く初めての人ならいろいろ考えないといけないと思うけど。
会社の面接をうける時に、みんながんばっているんだからとやる気を持つことができた。障害者の合同面接会に行ったとき、集団プログラムで皆さんが頑張っているのを見て、この面接も頑張るやらないといけないと思った。
不具合があった物を別の部署に伝える。仕事上で自分だけが不具合を発見した。品質管理部に一刻も早く伝えなくてはならないと思い、伝えた結果、大事に至らなかった。仕事では不具合の箇所、その物品の規模・個数、納期はいつか、・・・など、迅速に正確に物事を次の部署に伝え手行かなくてはならない。(全て会社の損失となるから)。客観的に、正確に、迅速に伝えることを現場でも心がけている。
人の意見を聞くのは増えたかもしれない。
メモをとることの必要性やそのメモの活用の仕方を学んだ。今もポケットサイズの手帳を胸ポケットの中に入れており、常にその日にやることややったことを確認している。手帳の中身は1日1ページくらいのペースで、「やることリスト」で活用している。
プログラムとして行ったことではない。コミュニケーションについては、通常していることを継続している。家族とも時々話をする
“自分カード”は転職時にも大変役立った。売店業務、一般事務関係の仕事に転職した。自分カードは面接や履歴書の記入のときに役に立った。
メモを取ることは今でも続けている。
あんまりない。特にない。仕事をすれば別だけど。
「ほう・れん・そう」：自分で完結してしまわないで、仲間と協調・協力しながら仕事をしていくには欠かせない。スケジュール管理：現在は主にスマホによる管理をしている。完璧じゃない。失敗もする。でも失敗を繰り返さないようにしようと心がけている。
あいさつを出来るだけするように意識した。いやー・・・、プログラムに参加した後ですね。仕事の現場で意識してやってることで

④不全「集団プログラムで得たことで、やってみただけどうまういかなかったと感じたことや、役に立たなかったことはありましたか？」

上記の質問に対して、「あった」と答えたのは5名、「あったと思うが思い出せない」と答えたのが3名、「なかった」と答えたのが8名であった。具体的には表4に示す通りである。

回答については、「メモ取りで状況把握が完全ではなかった結果、文章表現がおかしくなった」「メモに取るが、後で読み返したときにわからなくなる」といった記録に係る内容を述べたものが2名いた。この問題については表4に示す通り、記録のタイミング、記録のポイント、メモの活用不全、実際の必要度の低さなどが挙げられた。次に、「相手と話していると焦ってしまう」「自分のペースよりも相手のペースが速い」「話についていけなかった」というコミュニケーションの問題についての内容が挙げた者が3名いた。このコミュニケーションの問題については、表4に示されている通り、心理的緊張、会話のスピードの違い、相手のコミュニケーションに対する構え、会話時の評価などが挙げられている。

その他、「運動や作業などを継続しているわけではない」と課題の継続が維持していないと答える者が1名いた。また「役に立っているかわからない」「治療は治療、生活は生活と考えている」と

いう回答もあった。質問に対応しない回答としては、プログラムの中身についてできなかったことを述べた者もいた。

表 4(不全)

メモ取りで状況把握が完全でなかった結果、文章表現がおかしくなった。話を終わったときにメモをかくと、100%思い出せない。以前はなにもかもメモをとらなアカンと思ってた。ポイントをおさえないといけないんだということがわかった。
相手と話していると焦ってしまう。相手の話とかぶってしまう。教えられて全くだめだったというのはないが、だんだん話せなくなった。焦り感、緊張感 基本的に話す方ではないので。この先生とかは聞いてくれるけど、他の人聞いてくれる人ばかりではないので難しい。
人それぞれやけど、自分のペースよりも相手のペースが速い。一方的な人が多かった。しゃべっても速い人や、話を聞かない人がいる。合わせるのが難しい。伝えようとしても聞いてもらえないことがあった。
話についていけなかった。みんな(いろんな人)としゃべって、今までワンマンで自分で仕事してきたから、自分の発言で迷惑かけちゃうのではと思ったり、自分の意見をみんながどう思うのかと思うと怖くてしゃべれなかったりした。ちゃんとした人としゃべると、グループでしゃべるのはちょっとちがう。
たぶん集団でやったと思うんですけど・・・電話の受け答えの練習をしたんですが、実際にはうまくできなかったです。書くスピードが遅くて時間がかかった。普通のペースについていけなかった。
特にありません。
メモを取る。自分に大切だと思ったことをリストアップしてメモに取るが、後に読み返したときに分からなくなる。現在仕事では、そのようなことよっての影響は大きくない。言われたことはすぐ行動にしているからメモにとらないこともしばしばある。
特にプログラム参加後に運動や作業(料理)などを継続しているわけではないけど。(役に立たなかったとは思っていない)
OT で自分の絵を書くのは、絵心が無くてうまくいかなかった。自分の絵に限らず、絵は苦手なので。ST でブロック、見てない相手に状況をわかりやすく伝える。言葉で説明するのが難しかった。
そこそこできたので、できなかったというのはない。 役に立っているかと言われるとわからない。復職につけば別やけどまだウロウロしているの。
病院に入院中もリハビリやこういう集団プログラムやら色々うけてはきたけど、病院のことは一切考えないようにしている。治療は治療、生活は生活と考えている。
よくわかりません。

⑤不足「集団プログラムに参加されて、こんなことをもって欲しかったと思うことはありますか？」

上記の質問に対して、「あった」と答えたのは5名、「あったと思うが思い出せない」と答えたのが5名、「なかった」と答えたのが6名であった。具体的には表5に示す通りである。「あった」もしくは「あったと思うが思い出せない」という意見の内容については、「自分が思い出せないので、確認したい」「終了後も間隔を広げてお会いしたかった」「発表の場を多くしてほしかった」「体力に関するプログラム(PT)をもう少し増やしてほしかった」「パソコンを使うようなものがあればよかった」「生活場面をシュミレーションするような具体性のある内容の方がよかった」など、確認機会を作ること、終了後の交流機会の確保、コミュニケーションの場の工夫、プログラム回数や生活や仕事に实际的なプログラムなど、参加者により意見が異なった。

「なかった」と答えた対象者では「してほしかったことは大体されていた」「体験もいろいろできた」「病院なので意味のないことはしないと思う」「病院側の意見が正しいと思っているので」「比べる対象がないのでわからない」といった、専門領域についての比較判断の難しさと領域における信頼が意見としてみられた。

表 5(不足)

思い出すことを確認する。自分が思い出せないので、確認したい。時間的な余裕があまりないため確認する機会を作ってほしい。
かわりが定期的にもたれたが、終わったら終了ではなくその後も間かく広げてお会いしたかった。短期間に集中してやるのも良いけど、メンバーに2か月に1回くらいは会う機会はほしいと思った。
してほしかったことは大体されていると思う。やってみることはしないと思うので。病院なので意味のないことはしないと思うので一般人は口出しできない。一般の人からしたら運動は好きでした。
もうちょっと発表の場を多くして欲しかった。そういう場を広げてほしい。意見を言う場、もうちょっと羽を伸ばして、言葉を押し殺すのではなく意見を述べさせてほしい。そういう雰囲気をつくってほしい。こういう機会を失ったらアカン。
思い出せない。グループで話して発表とかは良かったと思う。答えがないので、いろんな意見がすべていいことなので。

特にないです。体験もいろいろできまし。
体力に関するプログラムをもう少し増やしてほしかった。やった時に、体力が落ちてるな、と感じたから。特にありません。
これはこれで良かったと思います。楽しかったように思う。
仕事でPCが使えないとどうにもならないため、プログラムの中でPCを使うようなものがあればよかったな、と思います。現在のプログラムは活用しているようで、いいことですね。
比べる対象がないのでわからない。やられたことに対して後になって有効だったと思う。具体的にはない。
病院側の意見が正解だと思っているので、特に希望はない。好きにしてください。
生活場면을シミュレーションするような、具体性のある内容の方がよい。はっきりとは覚えてませんが、何でもやってみようみたいなゲーム感覚のものが多かったと思います。参加はしました。
…今は思い出せません。

⑥対人関係「集団プログラムを経験して、人との関係の取り方が変わったところはありませんか?」(どのようなところが変わりましたか?仕事上で人と関わる上で意識していることはどのようなことですか?)

上記の質問に対して、「あった」と答えたのは11名、「あったと思うが思い出せない」と答えたのが1名であり、「なかった」と答えたのが4名であった。具体的には表6に示す通りである。

「あった」もしくは「あったと思うが思い出せない」と答えた中で、まずどのように活かされたかについては、「人と接すること」「家族と昨日何話したっけ?と話したりする」「相手が何を思い伝えようとしているかということを出来るだけ早く正確につかむ」「人の話を最後まで聞く」「物事を正しく理解して他人に正しくありのままを伝える」「相手の立場になって考える」「初めて会う人でも普通に会話して共同作業をすることができた」「人に親切にするように心がける」など、正確な理解と伝達、斟酌、応対の質やコミュニケーション量についての回答がみられた。仕事にどう活かされているかについては、「必要なことは確認」「空気を読んで返す」「自らしよう、積極的にしよう」「話を最後まで聞く」「報告・連絡・相談」「言葉遣いを丁寧に話すこと」「人がどう思っているかを意識している」など、理解と確認、伝達、状況理解、積極性、言葉遣いなどが挙げられた。

「なかった」と答えた4名からも「相手の立場に立って考える」「言われたことはすぐ行動する。出来ない時はメモを取る」「ほう・れん・そう(報告・連絡・相談)」「挨拶や雑談なども大事」「他人に迷惑をかけない」など指示における行動化、斟酌、伝達、基本的な社会的応対などが挙げられた。

表6(対人関係)

(どのような)人と接する方法。相手が言った内容を確認するようにしている。家族とは昨日何話したっけ?と話したりする。 (仕事上)必要なことは確認。勤務表をもらい他の時間を考えて使う。仕事では勤務表をみながら、仕事がない空き時間の使い方を考えていく。たとえば、16時から仕事のときは午前が空くからどう過ごそうか考えたりする。
(どのような)自分の日常生活が人とかかわりが主な世界なので相手との関わりが以前より積極的になった。 (仕事上)相手が何を思い伝えようとしているかということをつかむようにしている。家族以外の人との関わりを積極的に行うようになった。以前は(家庭生活の)中にこもってしまっていた。自分の思いも外に出さずに中にこもってしまうことが多かった。でもそれを出していくことは大事だし、仕事にも関わってくる。相手の話し方や表情を見て相手はどういう思いなのかを考えるようにしている。
どのような)人の話を最後まで聞くこと。そんなに変わらない。人の話を最後まで聞くことを意識してやるようにしている。できるだけはやっている。でも難しい、できない。聞いたことをメモすること。 (仕事上)人の話を最後まで聞くこと。空気を読んでかえすこと。仕事の上で、社員の人が忙しくしていたり、パソコンと向き合っていると、仕事のことを聞くのにどうしたらいいか、いつ質問したらいいか迷ったり、悩んだりする。家に帰って話すとずっとおれがおれがと言ったほうがいいのかと思うが。
どのような)前向き。 (仕事上)なるべく私はできませんではなく、自らしよう、積極的にしようとする。 自分から動いて、誰かがやってくれるとまったらだめ。ゴミが落ちてたら拾う、椅子がでたら片付ける、黒板を消すとか気づいてする、それがふつとちがう?書記とか洗濯、食器洗いとか自らやってるからね。
どのような)人の話をしっかり聞く。 (仕事上)話を最後まで聞く。こういう考え方もあるんやなあ、ひとは100人それぞれあって勉強になった。100%これが正しいではなくお客さんに接していかななくてはいけない。適当にきいて中途半端で話をしてはいけない、後でもめることになる。
わからないけど…相手の気持ちを考えることかな。これは昔からしていること。営業職を今までやってきたので。

どのように) 物事を正しく理解して他人に正しくありのままを伝える。「ありのまま」と「正しく」伝えることが大切。自分が肉付けしてしまうと余計に伝わらなかった。自分が理解しやすい表現が、他者にとって必ずしも理解しやすいとは限らない。これは現場で日々実践している。

仕事上) 報告・連絡・相談。これは仕事をする中で欠かせませんね。1 つでも欠けたら仕事が成り立たない。

言われた事はすぐに行動するか、出来ない時にはメモをする

(どのように) 集団の中にいると、どうしても人とコミュニケーションしなくてはいけない状況におかれる。その際に、相手の目を見て話すこと、相手の話を聞くときには頷きながら、相づちをうちながら話をきくことが大切だと教わり、今も日々意識しながら話すようにしています

(仕事上) 言葉遣いを丁寧にすること。

相手の立場に立って考える。他の人と話す機会は少ない。特に話す回数などは、プログラムの前後で変化はない。

言葉に対して敏感になった。「この言葉でいいのか？」と一歩考えて言うようになった。相手の立場になって、相手がどう思うかを考えるようになった。以前は、言わずとも勝手に言葉が出てきたし、自分の話していることは気にもとめなかったけど、考えるようになった。

人(お客さんが「どう思っているか、考えているか」を意識している

どのように) 今まで接したことがない初めて会う人とでも普通に会話して共同作業することが出来たこと。

仕事上) 特別に意識することはありません。会話することでお互いを理解してしないと始まらない。それが普通になってた。とりあえずしゃべって会話してそうしないと意思疎通できないから。特にないですね。

どのような) 人に親切にするよう心がけている。集団プログラムに参加した後に強く感じた。自分が年をとったのもあるかもしれないけど。腹が立っても笑顔でいられれば、相手も気持ちよく過ごせると思うから

仕事上) 話し方。わからないことでうまく逃げる。自分は発電機の点検・補修の仕事をしているが、お客さんから「これはどういうこと？」と聞かれるんだけど、わからないことが多いので、どうやって逃げたろうかなと常に考えている。自分が組んでいるもう一人の人がよくわかっているの、その人になるべく投げるようにしている。本を読んだりしてるけど…。現場で経験する中で少しずつわかってきたことはある、少ないけど。

人との関係性の取り方などは、病前・病後ともに変わらないと思う。「ほう・れん・そう」、こまめにコミュニケーションをとる。仕事の中での情報のやりとりだけでなく、日常的な挨拶や雑談なども大事

他人に迷惑をかけない。自分で担当している仕事は自分でこなせるように。
工場のラインにて製造・検品などの工程を担当している。

⑦自由記載「集団プログラムについて自由な感想を書いてください。」

自由感想については表 7 の通りである。内容は「家族と自分だけだったのが他の人と接することで他人のことも考えられた」「同じ立場の人を通して自分を見つめ知り広い世界に出て行くきっかけを作ってくれた」「いろんな人の話、意見がきけてよかった」「他者とのコミュニケーションの大切さや同じような仲間ができた」「みんなと一緒にやることが印象に残った」「後々になると、あーなるほど、こういうためにこのプログラムをしていたのかと分かってきました」「くだらないと思ったけど、今後のためになると思う」「色々な情報を交換した」など、参加することによって一時的にでも交流範囲が拡大したことや、属したグループに対するピアの感覚、協働、情報・意見交換、今後の可能性についての回答を得た。

表 7(感想)

家族と自分だけだったのが他の人と接することで、他の人のことも考えられ。それが社会とのつながりになったものだと感じた。

人と人との交わり方についてどうしても病気のはじめは自分を知られたくないという思いから交わりをさせていたのと同じ立場の人を通して自分を見つめ知り広い世界にでていくきっかけを作ってくれた。特に自分自身がどううつっているのかを同じ病気の人と交わるにより知ることができたことが大きい。他の人ともかかわりを持っていくこと。職場では上司と部下など上下関係のしほりもあるし、自分がどう見られているのかを知っていくことができてよかったと思う

他の人と接点ももてた、運動もできたし、学校の授業ぐらいいか運動しないので。

いろんな人の話、考えを聞けてよかったです。今思ういろんな人の話を聞けて勉強になった。仕事にもつながったと思う。すぐに意見を聞くより、こんなふうに日を置いて聞かれるのがいいと思う。すぐだと気付かないかも、外へ出ていろんな人と接してみてもいいと思う。仕事が楽しい。全国に呼ばれる。いろんなところに行った。仕事を紹介してくれる人とのつながりがうれしい。

すごくいいいいげんができたと思う。その時期は特定の知り合いとしかあうことがなかった為、新しい出会いができ、色々なよいことにつながった。早く仕事につきたいと実感した。プライベートでは人と接することが苦手で最初は嫌だった。仕事では大丈夫だったけど。

体力的なプログラムを増やして欲しかった。LAQ のプログラムはとても良かった。継続して欲しい。また、LAQ のプログラムは実場面でも生かされている。役にたっている。特にありません。

グループで話し合うことが苦手だった。仕事でも会議の場はあった。集団プログラムを受けている時は、苦労していた、早く仕事に復帰したいという気持ちが強かった。数字が覚えられない、日にちや仕事でも数字が入っているものはなかなか覚えられなかった。バイクが好きという話をした。競馬で落馬して受傷された人がいた。以前は銀行が驚くほどのお金を持っていたとの話を聞いた。体を動かす方が楽しかったな。2 人で背中を合わせて立つ、ボールを使って運動を行う

集団プログラムに参加する前から個別訓練は受けていたが、集団に参加して他者とのコミュニケーションの大切さや同じような仲間が出来た。仲間が出来た(同僚意識?)ことは現在にいたる復職への動機づけになったと思う。

みんなと一緒にやるということが印象に一番残っていた。メンバーとの交流は特にない。リハビリのときに廊下ですれ違って挨拶する程度。

集団プログラムを受けられたことはすごく良かった。もう少し長く受けても良かったかなって思う。それは受けているときもそうだし、今振り返ってもそう思う。

色んな人と話し合いして、考えさせられたけど、楽しかった。

このプログラムに参加する事で今の自分が有ると思います。このプログラムに参加するために、参加された病院関係と患者さんに感謝します。後々になると、あーなるほど、こういうためにこのプログラムをしていたのかと分かってきました。細かい説明がなかったのが後半だんだんわかってきました。後半は有意義に過ごさせてもらいました。前半はわからずに PT から入って体動かして、こんなんであえのかなと思っていたけど、後半心理とか言語になってなるほどとわかるようになってきました。やった自分とやってない自分を比べることはできないが感謝しています。

くだらないと思ってたけど、今後のためになると思う。なんでこんなことやってんのやろ、と思ってる。役に立ってるかどうか、自分ではわからない。昔の自分の方がよく考えてたかな。

障害をもったことで不安が高まり易い状況だったけど、プログラムを通じて相互に繋がることにより、色々な情報を交換したり、「自分だけじゃない」という安心感を得られました。

正直最初は面倒臭かった。やってみるとよかったような気がします。2 年前のことなのでよく覚えていませんが。

4. 家族のアンケート結果について

家族のアンケートは郵送にて行っており、インタビューを行っていない。そのため、自由記載の量やコメントが当事者とは比べると少ない結果となっている。

①記憶「集団プログラムについて、ご本人が語られていたことはありましたか？」

上記の質問に対して、「あった」と答えた家族は 7 名、「あったと思うが思い出せない」と答えた家族が 1 名、「なかった」と答えた家族は 3 名だった。詳細は表 8 の通りである。「あった」と答えた家族の自由記載については、プログラムの内容や、他の参加者の観察や交流から気づいたことやピアとしての感想が話されている。

表 8(記憶)

集団プログラムに参加できてよかった。自分だけではなかった。

集団プログラムの参加者のことや内容について。

あまり憶えていなくて申し訳ないのですが、その日にした事などを話してくれていたように思います。

同じ状況の人の考え方や気持ちが話しをすることで分るところが良いと言っていました。

ほとんど話しませんでした。

〇〇さんがどういう話しをした…やどんな場面でおかしい言動があったか…など他の人の言葉や言動に関して思ったことなど。

2 年前に他の病院(京大)で経験があり、内容については似たような感じ程度の話しでした。参加の人数や年齢、障害の程度が守山はバラバラだったので、そのことについての話しが多かった。

他の人は出来ていることを、自分ではできなかった。

②覚知「集団プログラムに参加されたことで、ご家族様からみてご本人が得られたことはありますか？」

上記の質問に対して、「あった」と答えた家族は 8 名、「あったと思うが思い出せない」と答えた家族が 2 名、「なかった」と答えた家族は 1 名だった。表 9 は「あった」と答えた家族からの記載である。プログラムのアプローチについてや他者と接することによる自己の対象化理解、内発的に持つ仲間感、対人関係の変化などが挙げられている。

表 9(覚知)

自分の病気を少しは理解できた。家族以外の人とも話すことができた。

集団の中で半裁を聞き取ったり、メモとして内容をまとめたり、相手に合わせて会話をしたりと、事故後苦手となったことへのトレーニングをしていただくことができ、職場復帰への力となりました

色々な方とお話しをする事ができて、自分を見つめ直すことができたことが良かったと思います。

同じ病気の方と出会えたこと(症状に違いはあっても) 普通にくらしていたら絶対に出会えない

人との接し方が勉強になった。他の方の症状を聞いて自分の参考になった。

実体験として本人が感じたこと(色々な人、症状があること)2度目の余裕もあり、おちついて参加出来たと思うのでよりプログラムの成果はあったと思う。記録ノート?のようなファイルは良かったと思う。

お仲間がいる嬉しさを感じているようでした。

周りの人に気を配るようになりました。

③習得「集団プログラムに参加したことで、ご家族様から見て変化を感じた点がありますか？」

上記の質問に対して、「あった」と答えた家族は7名、「あったと思うが思い出せない」と答えた家族が1名、「なかった」と答えた家族は3名だった。詳細は表10の通りである。「あった」と答えた家族の中では、「前向きに考えるようになりました」「意欲的になった」「楽しみをもって」「頑張らないとという気持ちになった」など、意欲や心理的な積極性、建設性についての記述であり、具体的なスキルへの言及は伺えなかった。「なかった」と答えた家族には、「変化を感じた事はなかったと思います」とする家族や、「協調性がないのがわかった」と、家族が発見した本人の特徴について述べられているものもあった。

表10(習得)

少し前向きに考えるようになりました(仕事に対しても)

具体的には答えられませんが、少しでも回復するためならと落ち込むことがあっても前向きに取り組めるようになったことはよかったと思います。

仕事に復帰していましたので、あまり変化を感じた事はなかったと思います。

以前よりリハビリに意欲的になったと感じられました。

協調性がないのがわかった

定期的に参加することで、生活のリズムというか、次回への楽しみを持てて、社会に参加しているように思えた

他の方も病気をもちながら頑張っておられるので、自分も頑張らないとという気持ちになった。

特にプログラムに参加して「これ」とは良いにくいですが、参加することで様々な体験ができたことで気持ち、意識の変化(通いにくい場所ではあるが、逆に1人でいってみるとJRは結構交通費がかかるとか、細かなこといろいろ)

その日その時間は気持ちをゆったりとでき、楽しい時間であった。

④不全「集団プログラムに参加して得られたことはあったが、実際の社会参加(仕事も含む)ではうまくいかなかったことや、また活かされなかったことはありますか？」

上記の質問に対して、「あった」と答えた家族は7名、「あったと思うが思い出せない」と答えた家族が1名、「なかった」と答えた家族は3名だった。詳細は表11の通りである。

「あった」と答えた家族の自由記載からは、実際の認知障害による仕事場面での困難が挙げられたり、職場の理解の問題が挙げられていた。練習場面と実社会とのギャップという形での記載もみられた。

表11(不全)

集団プログラムの中ではうまく他の人とも話すことが出来たが、仕事場ではなかなか自分の思っている事が言えず理解してもらえない。

メモをとってもその時だけになり、内容を後日必要な時に振り返ることができない。

プログラムによって得られたことは沢山あると思います。でも実際の社会は自分の思うようには行かないことばかりだったと思います。間違えることが多すぎて(サイズ、数量、金額)憶えることができなくて本人も辛かったと思います。

なかなか周りに障害があることが分ってもらえず仕事を続ける事がむずかしかった。

病気のことを知っている、理解してくれている人たちとの関わりとは実際の社会は違うものがあるとも思うので集団プログラムの中ではうまくいっても、仕事では待ってもらえない、理解してもらえないなど物事を悲観的に捉えてしまってマイナス思考になるなど

マイナス)基礎作りはできても実社会と模擬練習とのギャップ想定外がおおいこと(実社会では)プラス)現状の認識や経験を積む社会参加への意欲をもってもらうには必要で大切なプログラムだと思う

仕事上では、外見障害があるように見えないため力仕事等ではしんどく、きつく感じてでも手助けしてもらえないようなことがあったと思う。4時からの15分の休憩時間がとれないことがよくあった。たぶんその仕事が終わったら休憩に入っただけでね！と上司に言われても上手く時間内に済ませることができなかったりしたと思う。

最初仕事につき、失敗ないように気を張っていました。少しずつ安心して任せられるようになりました。

⑤不足「集団プログラムについて、こういうことをして欲しかったということはあるですか？」

上記の質問に対して、「あった」と答えた家族は2名、「あったと思うが思い出せない」と答えた家族が1名、「なかった」と答えた家族は6名、無回答の家族が2名だった。詳細は表12の通りである。「あった」と答えた家族の記載からは、メンバー構成や方法について言及しているものもあれば、家族同士の交流機会について挙げられたものもあった。

表12(不足)

内容についてはわかりませんが、人数がすくなくなったり年齢差があったりしたようなので、できれば同年代のグループをさせていただけると、もっと刺激を受けることができたのではないかと思います。

5～6年前なのであまり憶えてませんが、集団プログラムに行っている時間、主人を気にせずいれたのは嬉しかった。復職前だとずっと家にいることが多いので、出るきっかけがあったのは良かったと思う。

本人のプログラムの内容はそんなにくわしく分かりませんが、家族同士の繋がりが以前から通院されている方のご家族などもっと話す機会が持てたら良かった

よく憶えてないのですが、記録ノートがもっと改善されて後々の振り返りや本人の意識付けの材料になればいいなと思った。

おもいつきませんでした。

⑥対人関係「集団プログラムに参加して、ご家族関係に影響や変化はありましたか？」

上記の質問に対して、「あった」と答えた家族は6名、「あったと思うが思い出せない」と答えた家族が0名、「なかった」と答えた家族は5名だった。詳細は表13の通りである。「あった」と答えた家族の中には、家族内での会話内容や量の変化について述べられているものや、家族自身の対人関係や認識の変化（障害について語れる相手の存在、自分以外の当事者-家族について知る機会）についての記載がみられた。

表13(対人関係)

プログラムに行った日は帰りもその事について話し合い家の者にも病気について話すことがおおくになりました

適切な時期にプログラムに参加出来たことは本人に良かったと思います。このプログラムがあるということが、家族にとっては心の支えの一つとなっていました。会話も増えていたと思います。

集団プログラムの内容や他の方の話しなどをしてくれるようになったので、家庭内での会話が増えました。

人間関係が少し広がり、話題も増えた。私自身も話せる人、悩みを相談出来る人ができてとても心強かったです。

皆さん病気のご主人を奥様が支えておられたので自分も頑張ろうと思いました。

二度目ということもありあまり憶えていない。

家族同士お知り合いになれたことが私は嬉しかった。

⑦感想「その他、他にご家族からみて、変化を感じた点があればご記入ください。」

感想は表14の通りである。謝意や現在の状況、行動範囲の拡大、実社会に出る前の問題整理など、様々な内容となった。「特に変化は感じられない」との記載もあった。

表14(感想)

内容によっては指導を受けることも多かったようで、なかなか素直に受け入れられず逆に落込んでしまうこともありましたが……。しかしどんなときでも職場復帰を目指し頑張る事が出来たのは、厳しくもあり、温かい励ましがあったからこそ感謝しています。これからどう生きていくか生き甲斐をどう見つけていくのか悩みはつきませんが、支えて頂いている力をバネに頑張りたいと思っています。今後ともよろしくお願い致します。

守山のリハビリテーションセンターで治療して頂いた事やプログラムを受けたこと、いつも親身に話を聞いて下さりアドバイスを頂けたことがとても良かったと思います。先生方や皆様のおかげでここまで回復した事を心より感謝致しております。ありがとうございました。

復職する前に、他人との関わりについて、本人がどうするかを見れた(知れた)のは良かったと思う。家族にとっては本人と離れる時間ができたのは良かったと思う。一日中家にいたので。

特に変化は感じられません。

色々な方の意見を聞けて参考になりました。

自宅から遠かったので長く続かなかったけれど、本人が1人で行動範囲を広げるきっかけになった。

不安がっていた仕事も徐々に自信が持てるようになってきました。今は病気になる前と何ら変わらないと思うくらいになっています。

5. テーマ作文について

テーマ作文は参加者のうち7名からの回答が得られた。当初アンケートによる目的的な質問以外で回答される要素を検討することを目的としていたが、回答された内容は、ほぼアンケートで回答されたものと重複していた。7名の回答のうち、プログラムの内容も含めるとコミュニケーションや対人関係について、全員が何らかの形で触れていた。

5. アンケート回答、作文内容の量的分析について

集団プログラムの大目標は、「社会的遂行機能の獲得、社会性を基礎にしたコミュニケーション技術の獲得、相互交流による自己の対象化、アウェアネス、認識の促進」である12)。そこで、今回のアンケートの回答内容について、「社会的遂行機能」「コミュニケーション」「アウェアネス」に関係するフレーズを抽出した。加えて、大目標以外に「代償行動」「プログラム内容」に関係するフレーズも抽出した。

①本人アンケートの結果について

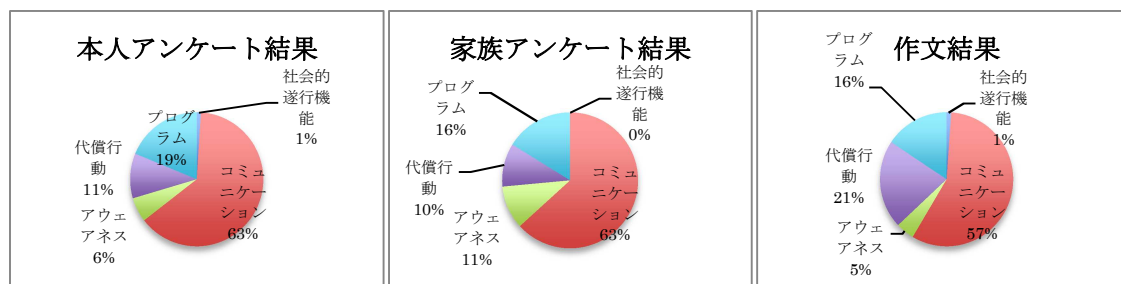
本人アンケートの結果では、集団プログラムに関係する回答として368個のフレーズが抽出された。そのうち、社会的遂行機能に関係するフレーズは4個であり、全体の1%程度であった。コミュニケーション技術に関係するフレーズは233個あり、63.3%占めていた。アウェアネスに関係するフレーズは22個(5.9%)であった。代償行動については40個(10.8%)あり、プログラムについては69個(18.7%)であった。プログラムについては、69個中明らかに内容のわかるプログラムは53個であり、最も多いのがPT24個(45.2%)、次にST19個(35.8%)、CP7個(13.2%)、OT3個(5.6%)であった。

②家族アンケートの結果について

家族のアンケートの結果では、集団プログラムに関係する回答として68個のフレーズが抽出された。そのうち、社会的遂行機能に関係するフレーズは0個(0%)であった。コミュニケーション技術に関係するフレーズは43個あり、全体の63.2%を占めていた。アウェアネスに関係するフレーズは7個(10.29%)であった。代償行動については7個(10.29%)、プログラムについては11個(16.17%)であった。

③作文について

作文からは89個のフレーズが抽出された。そのうち、社会的遂行機能に関係するフレーズは1個であり全体の1%であった。コミュニケーション技術に関係するフレーズは51個あり、全体の57.3%を占めていた。アウェアネスに関係するフレーズは4個(4.49%)であった。代償行動については19個(21.3%)、プログラムについては14個(15.73%)であった。



【 考察 】

以下、集計結果とアンケート回答、作文内容の量的分析で抽出した大目標（社会的遂行機能、コミュニケーション技術、アウェアネス）との関連性、代償行動、プログラムについて考察する。

1. 集計結果より

本人アンケートからは、「覚知」と「習得」「対人関係」の項目の回答から、何らかの形でスキルを得たり、活かしたりすることがあったと感じられている様子が伺える。「覚知」と「習得」については、家族も「あった」とした回答が多く、本人がプログラムに参加することで何らかの形で得たこと、変わったことがあったと感じられていたことが推察できる。本人と家族の項目の割合で差がみられたのは「不足」であった。実際に集団に参加していた当事者がプログラムを体験的に評価することは予測されることであり「ある」と答えた参加者は具体的な要望を提案することができていた。一方で家族については、現時点ではプログラムを直接見学する機会は殆どない。「なかった」とした回答の中に、家族自体が集団プログラムの詳細を知らず評価がしにくかった可能性も考えておく必要がある。家族が十分に評価できるだけの情報と機会がなかったことについては反省点であり、現在は本人からの毎回の活動報告と家族会開催時にスライドでプログラムの内容を紹介する機会を設定している。

2. 集団プログラムの目標との関連性について

集団プログラムの大目標は、先に挙げたように「社会的遂行機能の獲得、社会性を基礎にしたコミュニケーション技術の獲得、相互交流による自己の対象化、アウェアネス、認識の促進」である12)。今回のアンケート結果について振り返ると、「社会性を基礎にしたコミュニケーション技術の獲得（以下コミュニケーション技術）」について触れていた割合が参加者、家族とも6割を超えており、他の項目に比べても大きな割合を占めている。一方でアウェアネスについては、参加者は5.9%、家族は10.29%と少なかった。ただし、アウェアネスに関連する言葉の割合は少なかったが、意識し自覚して対応しているという点で考えると、アウェアネスがコミュニケーション技術に内包されている割合は比較的高いと思われる。社会的遂行機能においては、参加者、家族ともに殆ど回答されておらず、集団プログラム終了後1年以上の期間を経ての回想では浮上しにくい項目であった。社会的遂行機能は、集団での役割を理解しながら、活動の中で計画立案、実行、修正を行っていくという非常に複雑で難易度が高い目標であり、また、参加者がどの段階で問題が起きたのか、また能力が発揮できたのかという評価が難しい目標でもある。今回の結果で関連性は一部認められると考えるが、3つの目標を通じての社会参加を目指していることを考えると、社会的遂行機能の体験的習得、認識と汎化の課題は大きい。毎年提供するプログラムについては検討を重ねているが、今後も課題、体験と評価、獲得スキルとの対応についての完成度を上げていく必要がある。

3. 代償行動について

代償行動については、主にメモの取り方、タイミングについて、予定や実施の記録についてであった。プログラムの目標には代償手段のスキルは含まれていない。しかし、プログラムではすべてのセクションでメモ取りは必須であり、また記録したワークシートの管理も求められる。実際に活用する場面があり、その活用状況が個人もしくは集団活動の成功-失敗や、達成のレベルを左右していた。プログラムで原因（メモを取る・取らない）-結果（成功体験・失敗体験）としてのメモとりの重要性和方法について反復した意味はあったと思われる。記憶障害者を中心としたグループ訓練において、活用場面の提供が実用性を向上させていると言う報告もあり 15)、当プログラムでも類似の状況が生じた可能性は高い。次に考えられることとしては、集団で取り組むことで、自分以外の他者とコミュニケーションをとったり相手を観察することにより、行動を参照する機会や自己の問題を客観視する機会、また必要性を相互で確認し合う機会が生じ、自己の気づきが代償行動の意識付けになった可能性があると思われる。高次脳機能障害者のセルフアウェアネスを進める方法としてグループアプローチや 16)、記憶障害者のグループ訓練により病態の意識付けが進んだ報告もみられる 14)。以上をみても、集団でのアプローチが代償行動の必要性の認識や実際の記録とそれらの活用と管理に発展した可能性があると考えられる。

4. プログラムについて

① プログラム内容について

プログラムの内容については、PT (45.2%)、次に ST19 個 (35.8%) のプログラムに関連するフレーズの量が多かったが、記憶障害をもつ参加者もあり、全員が具体的なプログラムを挙げられた訳ではなかった。フレーズのバリエーションも多くはなかった。実際のプログラムと得たこと（気づきやスキル）を結びつけて答えている者もいたが、これらは一部であり当事者の効果実感からプログラムと関連性を見いだすことは困難であった。家族からは具体的な内容は挙げられず、アンケート回答からは、当時者もプログラムそのものよりはその時の対人行動について家族に語ることに多かった様子がうかがえる。プログラムとの関連性においては、想起からではなく実際の場での観察評価や行動分析など別の方法で検討する必要がある。

② プログラム上の課題

「不全」の項目をみると、本人のアンケート結果からはコミュニケーション面とメモとりなどの代償行動についての不全が主に挙げられていた。コミュニケーションについても、代償行動についても、効果としての側面もあれば、実際上の困難を感じられた側面もあったことがわかる。得たことが実際にうまく活用できない場合は、その問題を個別訓練などで分析、検討して本人に適した方略を練ることが必要である。この点においては、集団プログラムと個別訓練との連携や相乗効果についての課題があると考えられた。

家族からは、移行的社会活動と実社会とのギャップや社会的理解の不足、社会に対応できる能力のシェイピングなどが問題として挙げられていた。これについては、プログラムの研鑽と提供だけで解決できる問題ではない。今後は集団プログラムの期間における提供内容だけでなく、先の社会リハや社会支援にどう展開させていくかという課題が残ると考えられる。そのため後方連携も視野に入れたバックアップ体制なども検討していく必要があると思われる。

【おわりに】

アンケート回答者の中には初期の参加者になると7年前にさかのぼる必要のある者もいたが、受講の時期に関わらず何らかの反応が得られ、比較的好意的な意見が多かったのは興味深かった。ある程度年数がたっても体験したことの意識が継続していること、またそれが企画側の狙いから大きく外れていなかったことには意味があると思われる。今回は回想した内容を取り扱い集団プログラムの効果を検討したが、実際の行動面との関連性や、実施状況の確認までは至っていない。集団プログラムから得たことを発展的に継続的に課題として行動し習慣化していく試みを今年度から試験的に開始している。それらの結果も含め今後検討していくことになろう。

【謝辞】

今回の調査研究において、ご協力いただいた当事者の方々、そのご家族に対し、厚くお礼申し上げます。

【引用文献・参考文献】

- 1) 平成17年度 高次脳機能障害支援モデル事業実施報告：国立障害者リハビリテーションセンター, 2006
- 2) 中島恵子編著：高次脳機能障害のグループ訓練, 三輪書店, 2009
- 3) 障害者職業総合センター職業センター支援マニュアル No. 5: 高次脳機能障害者の方への就労支援～職場復帰支援プログラムにおけるグループワーク～, 独立行政法人高齢・障害者雇用支援機構, 障害者職業総合センター職業センター, 2010
- 4) 繁野玖美・他：「高次脳リハビリグループ」の紹介と効果：地域の福祉センターでの取り組み」作業療法 21, 526, 2002
- 5) 馬屋原誠司・他：重度の記憶障害を呈した高次脳機能障害者への集団認知リハビリテーション--PDCA 訓練による障害認識向上の試み, 九州ルーテル学院大学発達臨床センター紀要 (6), 75-87, 2007
- 6) 馬屋原誠司・他：高次脳機能障害者への集団認知リハビリテーション--PDCA 訓練による病態認識の改善の取り組み, 九州ルーテ学院大学発達臨床センター紀要 (7), 41-47, 2007
- 7) 橋本優花里・他：高次脳機能障害の心理的問題を対象とした集団プログラムの開発ーピア・サポート・トレーニングと認知行動療法の観点から, 福山大学人間文化学部紀要 9, 2009
- 8) 橋本学・他：高次脳機能障害者に対する社会復帰準備のための小集団訓練「リハビリテーション学級」の試み, リハビリテーション医学 47(10), 728-734, 2010
- 9) 岡村陽子・他：社会的行動障害の改善を目的とした SST グループ訓練, 高次脳機能研究 30(1), 67-76, 2010
- 10) 山里道彦・他：デイケアの形態をとった慢性期外傷性脳損傷者のグループ訓練, リハビリテーション医学 48(10), 659-665, 2011
- 11) 高次脳機能障害支援の手引き：厚生労働省社会・援護局障害保健福祉部, 国立障害者リハビリテーションセンター, 2008
- 12) 川上寿一・他：高次脳機能障害者に対する集団プログラムの実施についての研究, 平成20年度調査・研究事業報告書, 75-92, 2008
- 13) 種村純・他：高次脳機能障害実態調査, 高次脳機能研究, 31(1), 19-31, 2011

- 14) 中島恵子・他：記憶障害患者へのグループ訓練の試み（その 1）, 認知リハビリテーション 2001, 58-62,
- 15) 坂本一世・他：記憶障害患者へのグループ訓練の試み（その 2）, 認知リハビリテーション 2001, 63-65
- 16) 長野友里：高次脳機能障害の Awareness, 高次脳機能研究 32 (3), 433-437, 2012